子性格テスト（NEO-FFI）の結果をあわせてみると、
お笑い鑑賞後は標準的な性格傾向の人は「緊張と不
安」、「怒りと敵意」の得点が減少、両面的な性格傾向の
人では「活動的積極性」の得点が上昇、内気な性格
傾向とマイペースな性格傾向の人は「緊張と不安」
の得点が減少していた。以上の結果から、全体傾向
として笑いにより緊張や不安、怒りや当惑といった感情
が低減するようだが、その出方は性格の違いにより多
少異なるということが示唆された。

13. 児童虐待に対する大学生の意識調査
神戸女学院大学医学部医学研究室
○三木 美和 竹内 理恵 原田 千尋
福井 恵 藤井 誠 今井 介呂子
中川 ひかり 今井 香織 生野 瞳子
近年なされている児童虐待の予防対策は、現実で
ある人向けられており、将来親になるであろう親子
養育への対策には至っていない。そこで、大学生が児
童虐待に対しどのような考え方をしているのかを調
査した。調査期間は、2004 年 7 月から 8 月末、対象者
は、大学生 656 名（男子 325 名、女子 327 名）。
得られた結果を以下に示す。①身近に虐待を見聞き
した経験がある人は 15%，②虐待を軽視する人は 4%，
③子のほうが親に共感的、④虐待の対処に積極的、
⑤不十分な知識、⑥虐待を観念的にとらえ、当事者意
識が低い。また本調査のほとんどの項目において、女
子のほうが男子よりも有意に意識が高かった。
これより、大学生に向けた予防教育の実施が効果
的であると考えられる。よりよい予防教育のためのポ
イントとして、①知識を吸収できる状態＝当事者意識
の向上、②男の子の低い認識の向上＝男子大学生へのア
プローチ、以上 2 点が重要であると思われる。

14. がん患者に対する心理的サポートプログラム開発
に向けての基礎的研究所 1－がん患者が抱える
心理の諸問題の現状および心理的サポートへの
ニーズの把握—
京都ノートルダム女子大学医学部
○中村 千珠 鎌田 桛 河瀬 雅紀
目的：がん患者の心理的特性に合わせた支援プロ
グラムを開発するために、がん患者の心理的諸問題への
現状認識および心理的サポートへのニーズの把握を目
的とした。 方法：通院中および入院中の患者を対象
に、独自に作成した質問紙で現状認識とニーズを調査
し、SDS、STAI、SUBI で心理的状態を評価した。 結
果：132 人分のデータを因子分析した結果、現状認識
では、受容、家族、社会の資源、宗教・信仰、自立・
協力、友人、平穏が、ニーズでは受容、自己価値、社
会的資源、家族、宗教・信仰、自立・協力、耐忍が抽出
された。抑うつ症の強いが家族、宗教・信仰、自
立・協力、友人において、精神的健康度が低いほうが
受容、家族、社会的資源、宗教・信仰、友人、平穏に
いて、不安が強いほうが受容、平穏において有意に
得点が低かった（t 検定）。 結論：抑うつ、精神的健
康度、不安の程度により、援助における重点の置き方
を変える必要が示唆された。

15. 口腔不整歯症における患者の心理社会的背景
—Life Events 調査表による検討—
市立松方市民病院歯科口腔外科 中野 信・
関西医科小児科内科 中西 英生
本報紙患者 154 名の環境要因（発症前 1 年間）に検
討を加えた。その結果、①該当項目数は 2.4±1.9 件で
約 9 割に 1 件以上該当項目がみられ、②自分の難病、
家族・肉親・親戚の死や難病、子どもの学校・職場で
の問題や結婚、夫婦・姉妹・親子・兄弟間の対人関係、
職場・仕事・家事・介護の問題や経済的・金銭的問題
が多かった。③該当項目数に性差はなかったが、男性
は仕事の負担の増加や退職、女性は家族の病気が有意
に多かった。④中高年者（＞56 歳）は中低年者（＜55
歳）に比べ有意に該当項目数が少なく該当無類も多}
また中高年者は職場や仕事の問題、子どもの問題や金
銭的問題が有意に多く、他方中高年者は友人・親戚の
死や自分の病気が多かった。本報紙患者においては性
別・年齢別に特有の傾向の環境要因が認められ、また
四苦・不平逆・逆の考え方として環境要因も少なくな
かった。本患者に対しては環境要因に応じたより適切
な配慮の方向を模索していく必要性が痛感された。

16. 医師・心理士の態度が治療時長をスムーズにさせ
た 1 例
木本女性クリニック
○高井 直 杉 木下 千曉
心身障害を呈する患者への長期にわたる心理治療に
おいては、患者の治療に対する依存性が治療を長引
かせ双方が納得した形で終結することが難しいとされ
る。今回、医師および心理士が同様の態度を示したこ
とが治療時長に結びついた症例を報告し考察した。患
者は 30 歳、女性。主訴は不眠・イラライ・頭痛であっ
た。認知行動療法を用いた結果、種々の問題は改善され育児に対する自己の無力さの問題が残存した。その頃第2子の希望が述べられたが医師・心理学士ともに否定的な反応を示した。結果、患者は育児に積極的に取り組み第2子をもうけると自己決定し、抑うつ症状も消失し、急速な終盤へと向かった。このことから症状の低減した安定期に依存対象の心理療法師と同様に否定的な反応を示したが、患者の自己決断力を高め治療終盤をスムーズにさせたと考えられる。

17. 性同一性獲得に問題をもつ抜毛癖の1例
こども心身療外研究所/診療所
○大塚 彰子 富田 和巳
性転換願望をもつ抜毛癖を呈した思春期女子症例について報告した。当初、「町で地に嫌悪感」と「今後の方向性」を主訴とする性同一性の問題や抜毛癖に関しての言語化は少なかったが、治療者が性ののみならず思春期の同一性拡散状態としてとらえて患者を巡る対人関係を中心に捉え、のれいに抜毛や性転換願望への言及が増え、両親も患者への関わりを増やすと、患者は過去の外傷的な経験の想起が活発なカットを始めていたが、抜けている毛を見つけたとき、自分の身体を傷つけたくない」と性転換願望を否定し、抜毛の状態も改善され、主体的な進路も決めるなど同一性獲得への課題に取り組み始めた。

性同一性障害を疑わせる思春期症例においては、性的違和感が認められやすい発達段階であることや話題性を取り入れやすい年齢であること、考慮し、慎重なる治療態度が必要であることを述べた。

18. 遷延した胃癌術後腹痛が検査と病態説明により軽快に至った1例
関西医科大学心療内科学講座
○堀 裕典 四宮 敏章 北澤 俊人
福永 幹彦 中井 吉英
症例：60歳、男性、主訴：脾周囲腹痛。現病歴：X-7年で当院外科にて胃癌手術施行。その後軽まる腹痛を認めていたが、その旨を主治医に伝えても「器質的には問題ない」と取り上げてもらえず。X-6年に透析導入、その後徐々に腹痛頻度が増加。X年にて採行手術を希望し、手術施行して当院外科にて再度紹介受診。「精神的なものだ」と言われ当科紹介受診、精査目的にて入院。経過：悪性疾患の再発、転移を含め器質的な要因の除外から開始したが異常所見なし。経口 Ba 透視にて大腸全体の spastic な像あり、また立位像では横行結腸中央部が機能に変化していたため、同部位の腸管灌腸が示された。大腸の機能低下、癌増加が痛を構成して軽快し、自律神経失調をきたし、二次的な抑うつ状態を形成するという説明が患者の不安軽減につながり、症状改善につながった1例である。

19. 患者の自己決定を重視することにより治療意欲が芽生えた2型糖尿病の1例
関西医科大学心療内科学講座
○計屋 典子 四宮 敏章 和田 靖義
福永 幹彦 中井 吉英
はじめに：血糖コントロールが困難であった患者が、受容的な関わりと個別の説明を通して状態を理解し、治療意欲が芽生えた1例を経験したので報告した。
症例：70歳、女性、主訴：空腹感。現病歴：X年離りの2型糖尿病で、X-13年よりインスリン導入され、当院内科で通院していた。薬物療法や教育入院を行ったが改善し増悪を繰り返し、X年X月の副作用死後。空腹感と低血糖への不安が増強し、血糖コントロールも含め当科紹介となった。同年X月感冒後微熱が続き、不安感強く血糖コントロール不良となったため当科入院となった。経過：入院時病状に対する理解が不足しており、血糖の変動に対する不安から食行動が促進され悪影響の上昇を招くという悲鳴を閉じるところと考えた。そこで合併症を含めた糖尿病の再評価を行い、受容的な態度が患者の理解にあわせ繰り返し説明を行った。さらに患者の自己理解と自己決定を重視した治療方針を決定するための面接を重ね、栄養士による実際的な栄養指導を加えて行った。その結果、病状に対する理解と改善への対応可能性に対する気づきが得られた。食事療法により入院時はHbA1c：9.0であったのが、X週間後には8.1に改善した。
考察：治療者の説明に対し受付的である即倉的導入が終結するという従来があり、内視鏡頭へとつながりにくい状態を想定し、指導という視点ではなく患者の自己決定を重視することで自己覚を引き出し治療意欲が芽生えたと考える。退院後は外来にて食行動の自発的な改善努力を促していくこととする。